愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第9号, pp.55～60,March,2024

大学生の環境配慮行動に関する一考察：アンケート調査と清掃活動に基づいて

筒井 和美*　越間 彩花**　古木 志帆**　平松 出帆**
中村　優**　加藤 来実**
*家政教育講座　**学部学生

A Study for Environment-Conscious Behavior of Undergraduate Students - Based on Questionnaire Survey and Cleaning Activities -

Kazumi TSUTSUI*, Ayaka KOSHIMA**, Shiho FURUKI**, Izuho HIRAMATSU**, Yu NAKAMURA**, and Kurumi KATO**

**Department of Home Economics Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*
***Undergraduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

要約

大学生の環境配慮行動を把握するため、Webアンケート調査や大学構内の清掃活動などを行った。登校時に水筒、弁当、箸の所持率が低いこと、クラブ・サークル活動等の利用施設周辺において生活用品をはじめとする様々なごみが収集されたことから、大学生は昼食時に包装済み加工食品を多用している可能性があると予想された。大学生は施設利用者の一人として、また環境保全のためにも、学校生活において自然や環境に配慮した行動を自主的に取る必要がある。

Keywords　大学生、環境配慮行動、ごみ、清掃活動

Ⅰ　緒言

環境基本法[1]には、地球の環境保全に関わる基本理念として「環境の恵沢の享受と継承」「環境への負荷の少ない持続的発展が可能な社会の構築」「国際的協調による地球環境保全の積極的推進」などが掲げられており、国、地方公共団体、事業者、国民がそれぞれの立場で生産・消費・廃棄の各工程における環境負荷を軽減する必要がある。自治体や学校給食などにおいてさまざまな取り組みが行われている。

環境省の調査(2023)[2]によると、ごみ総排出量は4,095万トン（東京ドーム約110杯分）、一人一日あたりのごみ排出量は890gと試算されており、リサイクル率は19.9%と横ばい状態にある。SDGsの目標達成のためには、我われ一人一人がさらに日々の暮らしを環境配慮型へシフトさせ、地球の自然を末永く守っていく必要がある。小泉ら（2002）[3]は昼間在宅系が多い者は“余分な包装の拒否”、“使い捨て品の不使用”を心掛けており、世帯属性の職業により減量化運動の実行有無がごみの排出量に影響を与えていると報告している。たとえば、厨芥が35%以上と最も多いが、ごみ排出量の少ない者は生ごみの減量に努めている[3]。

本調査では大学生の環境配慮行動について Web アンケート調査を行うとともに、大学構内のごみ減量のための取り組みを行った。登校時の所持物、クラブ・サークル活動等で利用する施設への美化意識を調べる他、大学構内の清掃活動による効果についても考察した。大学生のごみ問題意識ならびにごみ減量行動についても検証する機会とした。

Ⅱ　調査方法

2.1　大学生の環境配慮行動に関する Web アンケート調査

2022年4月12日～4月18日、愛知教育大学教育学部の大学2～4年生及び大学院生の計334人（男性145人、女性185人、性別に対して無回答4人）を対象に、大学生の所持品に対する環境配慮について Web アンケート調査を実施した。スマートフォン・携帯電話、財布、キャッシュカード、筆記用具、ノート・ルーズリーフ、パソコン・タブレット、ハンカチ、ティッシュ、ペットボトル飲料、水筒、弁当、箸、エコバックについて、それ

ぞれ所持率を調べ、世帯毎に整理した。なお、有効回答数は 333 人（男性 145 人、女性 184 人、無回答 4 人）で、二世帯が 271 人、単独世帯は 62 人である。なお、世帯の影響をみるため、カイ 2 乗で有意差検定を行った。

2.2　大学構内の清掃活動

2023 年度前期「生活環境論」の一環として、受講者で大学構内のごみ減量を目的に清掃活動やポスター作りに取り組んだ。

1）ごみの実態調査

2023 年 4 月 17 日に愛知教育大学(井ヶ谷キャンパス)の第 2 体育館、自然科学棟裏の文化系サークル棟の各周辺でごみ拾いをそれぞれ 15 分行った。各場所のごみ拾いは 2～3 人で行い、収集後に燃えるごみ、燃えないごみ、ペットボトルなどに分類して、ごみの実態について調べた。

後述のように、2.2 4）ポスター掲示の効果を調べるため、2023 年 7 月 10 日に再度、ごみの実態を調査した。

2）ごみ減量のための議論

2023 年 4 月 17 日に「生活環境論」の受講者同士で学内のごみ減量について話し合った。なぜ、人はごみを捨てるのか、落ちているごみを進んで拾わないのか等、私たちの暮らしを取り巻くごみ問題について意見を交換し合った。

3）クラブ・サークル活動等の利用施設の美化意識に関する Web アンケート調査

2023 年 5 月 16 日～5 月 29 日、愛知教育大学のクラブ・サークル、委員会に所属する大学生 84 人を対象として利用施設の美化意識について Web アンケート調査を実施した。回答者 84 人のうち、A）第 2 体育館を使用するクラブが 19 人、a）運動場を使用するクラブは 15 人、B）文化系サークル棟は 33 人であった。また、団体数は順に A）4、a）10、B）17 となった。まず、①クラブ・サークル名、②美化係の有無とその内容、③現在の利用施設の美化状態について尋ねた。③については 4 点（とてもきれいだと思う）、3 点（きれいだと思う）、2 点（きれいではないと思う）、1 点（全然きれいではないと思う）の 4 段階評価で回答してもらい、4 点又は 3 点を選んだ者には④として「施設をきれいに使うために意識していることは何ですか」を、2 点及び 1 点の者には「施設がきれいになるにはどうすればいいですか」とそれぞれ用意し、自由形式で記述してもらった。

4）ポスターづくりと啓発活動

2023 年 5 月 29 日～6 月 5 日に、構内のごみ減量の啓発を目的としてポスターを 2 種類作成した（図 1）。例えば、カメラ越しにごみを捨てている男性と清掃活動している女性の様子を示したものをカラー印刷し、野外でも濡れないようにラミネートしたものをポスターとした。これらを 2023 年 6 月 19 日～7 月 10 日、第 2 体育館、文化系サークル棟の周辺にそれぞれ 4 枚掲示した。

図 1　啓発用学内ポスター

2.3　倫理的配慮

国立大学法人愛知教育大学研究倫理規定に従って、Web アンケート調査を実施した。得られたデータは ID 番号をつけて匿名化し研究以外に使用しないこと、回答の有無や内容によって不利益を被ることはないこと等を明記し、同意を得た者に限り回答してもらった。

Ⅲ　調査結果と考察

3.1　大学生の所持品からみる環境配慮行動

図 2 に登校時の大学生の物品所持率を居住形態毎に示した。スマートフォンや携帯電話、パソコン・タブレット等の電子機器の所持率は、居住形態に関わらず、いずれも 72%以上を示したが、水筒、弁当、箸などの食事に関するものはいずれも低かった（図 2）。例えば、水筒については二世帯以上が 271 人中 139 人（51.3%）、単独世帯は 62 人中 4 人(6.5%)となり、後者は有意に($p<0.01$)に少なかった。また、弁当並びに箸は二世帯以上が順に 49 人（18.1%）、40 人（14.8%）、単独世帯は 1 人（1.6%）、1 人（1.6%）となり、前述同様に単独世帯は有意に（$p<0.01$）少なかった。本調査の単独世帯の大学生は水筒、弁当などを持参せず登校していることが確認された。このような水筒や弁当の所持率の低さから、多くの者が登校後に包装済み加工食品を購入していると予想される。環境省の平成 28 年度環境にやさしいライフスタイル実態調査[4]では若い世代ほど、大気汚染、環境汚染などへの関心が低いと報告されており、環境保全のため日々の暮らしの中で何ができるのかを考え、自分事として現状に対して向き合っていく必要がある。

筒井ら（2023）[5]は、本調査と同じ対象者に Web アンケートを調査しており、大学生はサスティナブファッションへの関心が低く、ファストファッションをリサイクル、あるいはリメイクするのはいずれも 15%以下と低いと報告している。衣食に限らず、限りある資源を使い続けるようにするには、私たちの身近な日常生活の見直しは不可欠である。

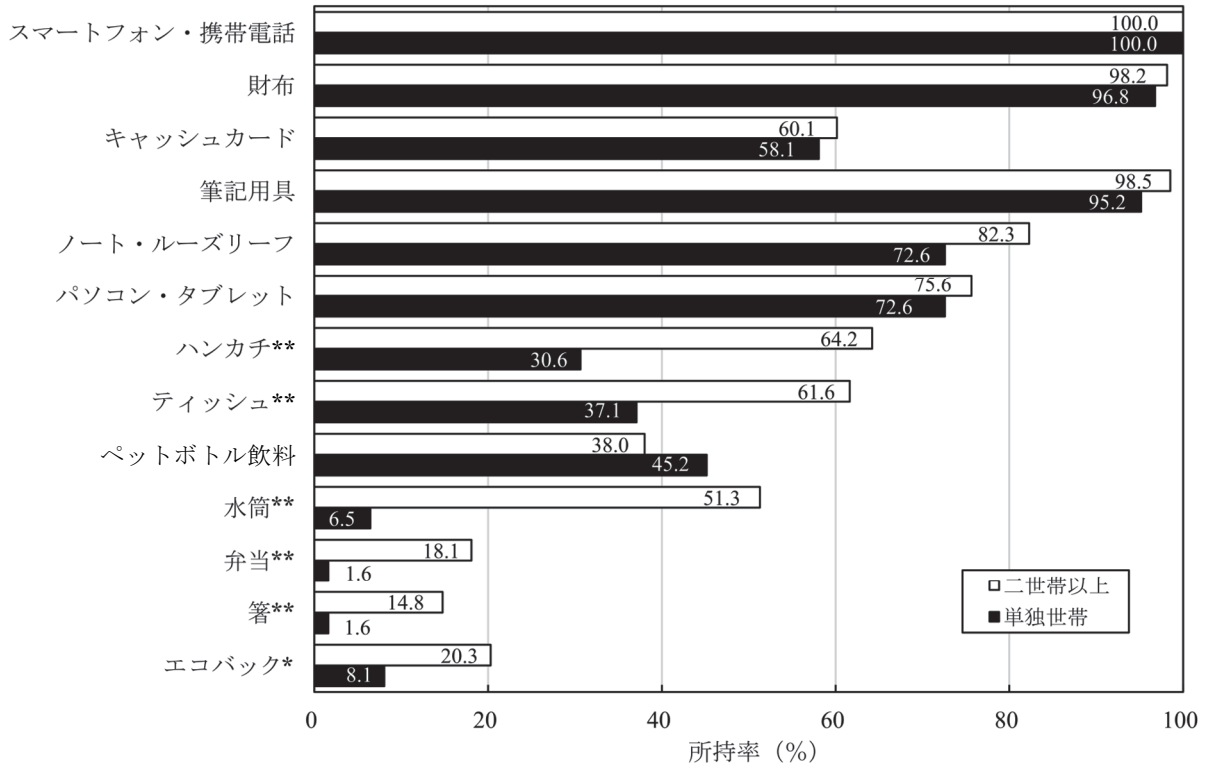

図 2　登校時の大学生の物品所持率

（ $^{*}p<0.05$、$^{**}p<0.01$ ）

次に、大学構内の清掃から大学生の環境配慮行動について考察することにした。

3.2　大学構内の清掃活動とごみの実態

図 3 に、2023 年 4 月 17 日に大学構内で収集されたごみを示した。清掃時間はわずか 15 分と限定したが、A）第 2 体育館周辺には燃えるごみ 23 個、燃えないごみ 12 個、B）文化系サークル棟周辺で燃えるごみ 16 個、燃えないごみ 37 個、ペットボトル 2 本などをそれぞれ収集し、中でも特に食品包装容器（プラスチック類）が多かった（図 3）。入学式（4 月 5 日）から約 2 週間後の清掃であったが、このような実態であった。小島ら（2015）[6] はごみへの関心とライフステージ要因をテキストマイニングで分析し、ライフステージの変遷とともに家庭内でのごみ管理の役割、地域とのつながりなどが変化し、

A）第 2 体育館周辺

燃えるごみ　23 個
紐、ゴム

燃えないごみ　12 個
養生テープ、菓子包装紙
自販機プレート

B）文化系サークル棟周辺

燃えるごみ　16 個
マスク、レシート
コンビニ紙、新聞紙

燃えないごみ　37 個
おにぎり包装紙、菓子包装紙
ベーコン包装容器、
コンタクトレンズ容器
ペットボトル　2 本　粗大ポール

図 3　大学構内で収集されたごみ

ごみとの関わり方に変化を与えていると報告している。

ごみがなぜ構内で散乱しているのか、また、捨てられたごみを拾わないのかについて、大学生5人と授業担当教員で議論した。その内容の一部を以下に紹介する。

なぜごみが多いのか？

あ）さん：おにぎりの包装紙のようなものが風で飛んでいったが、落ちたことに気付かなかったのだろう。

い）さん：きれいな場所であれば、直ぐにごみを拾うが、もともと汚い場所だったら、落ちても拾わないかも知れない。名前を書いたペットボトルもあったが、うっかり忘れてしまった人のごみも多いのでは？

う）さん：簡単で便利なものが増え続けている訳だから、コンビニで買った商品のプラ容器は適切な場所に捨てることができるのでは？

運動部と文化系でごみ量が違うのはなぜか？

え）さん：運動部は体育館の使用が予約制、かつ、共同の施設なので、飲食をほとんどしないけれど、文化系は自由度が高いので飲食しながら活動を行うことが多いのでは？
イベントの準備などで、遅くまで学内に残ることがある……。

ごみ減量のためには？

あ）さん：これだけたくさんのごみが捨てられているので、ゼロにするのは難しい。でも、各自がお弁当を持参すれば、ごみを減らせるのでは？
ペットボトルも水筒に替えてみれば？

い）さん：ごみを減らすために、啓発活動の必要がある。

う）さん：土壌で分解されるごみ（生分解性プラスチック）ならば、捨てても、いつかは自然に帰るので、環境に優しい。

お）さん：ポスターを作り、どのようなキャッチコピーなら、ごみが減るのか調べてみたい。

3.3　クラブ･サークル活動等の利用施設に対する美化意識に関するWebアンケート調査結果

次に、クラブ・サークル活動等の利用施設に対する美化意識について Web アンケート調査を行うと、84 人の大学生から回答が得られた。回答者は、A）第 2 体育館の使用者がバスケットボール部、バドミントン部、バレーボール同好会など、a）運動場使用者は硬式野球部、陸上競技部、ラクロス部等、B）文化系サークル棟の場合、管弦楽団、吹奏楽部、軽音部、大学祭実行委員会などにそれぞれ属していた。

②クラブ･サークル内の美化係の設置有無を尋ねると、A）第 2 体育館が 4 団体中 0 団体、a）運動場は 10 団体中、陸上競技部、ソフトボール部の 2 団体、B）文化系サークルは 17 団体中、軽音楽部、大学祭実行委員会、子どもまつり実行委員会の 3 団体には設置されていた。多くの団体において、美化係が設けられていなかった。

次に、③クラブ・サークル活動等の利用施設がきれいであると思うかと尋ねると、「4 点：とてもきれいだと思う」、「3 点：きれいだと思う」と答えた者は A）第 2 体育館が 19 人中 6 人（31.6%）、a）運動場は 15 人中 7 人（46.7%）、B）文化系サークル棟は 33 人中 8 人（30.3%）であり（図 4）、クラブ･サークル活動の種類に関わらず、現在の施設利用状況について改善すべであると答えた者が多かった。B）文化系サークル棟周辺のごみ量は多かったが、利用施設に対する美化意識については A）第 2 体育館とほぼ等しかった。

③について「2 点：きれいではないと思う」、「1 点：全然きれいではないと思う」と回答した者に対して利用施設をきれいにするにはどうすればよいかを問うと、その理由として、A）第 2 体育館の方では“日頃から意識してきれいに使用する”、“施設を修理する”などの意見があった。また、B）文化系サークルでは“掃除してから活動に取り組む”、“サークル全体で清掃活動をする”、“ボックスルーム自体を新しく建て直す”などの意見が挙げられた。現代は簡単で便利なものに溢れているが、自然や環境に配慮せず、使いっぱなし、廃棄しっぱなしでは豊かな自然やエネルギーは枯渇してしまうという危機感を持つべきである。そのため、クラブ・サークルなどの活動内容や取り組み形態は異なるが、一人一人が施設利用者としてそれぞれが美化意識を持って、自分事として清掃活動を団体活動の一部として取り組んでいくことが大切である。

西尾（2005）[7] の調査では、消費者のごみ減量行動意図はエコロジー関与、コスト評価、社会規範評価などによって規定されており、例えば「リサイクラー」は省エネやリサイクルといった省資源行動の実践度は高いが、

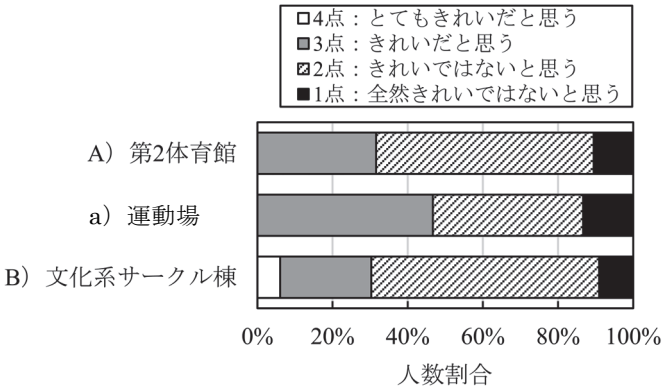

図 4　アンケート調査結果
③部活動・サークル活動等の利用施設の美化状況

その他のエコロジー行動（ごみ削減、エコロジー商品選択、エコロジー運動参加）の実践度は低いことが明らかになっている。CO_2 排出削減のための環境配慮行動を推進するには、さまざまなエコロジー行動が求められる。

3.4　ポスター掲示後のごみの実態調査

ポスター掲示後に構内のごみ量を調査すると（図 5）、A）第 2 体育館周辺は燃えるごみ（菓子包装紙、ヘアゴムなど）14 個、燃えないごみ 1 個、B）文化系サークル棟周辺が燃えるごみ 17 個、燃えないごみ 2 個となった。ポスター掲示前に比べてごみ量が少なかったが（図 3、図 5）、ポスターの効果、又は施設利用者の減少なのかは分からなかった。

本調査に携わった大学生にごみ問題に対する意識変化について尋ねると、“ポスター掲示した施設周辺の衛生環境状態について気になるようになった”、“学校以外でも地元の駅、施設周辺に落ちているごみの種類を確認するようになった”という意見があった。清掃活動を通して、学校をはじめ、家庭や地域の環境問題への意識が高まり、SDGs の目標達成のための行動変容への契機となった。このような取り組みの効果が、今後、大学生においてどれだけ持続されていくのか、経時的に調査して行く必要がある。

A）第 2 体育館周辺	B）文化系サークル棟周辺
燃えるごみ　14 個 菓子包装紙、ヘアゴム 卓球ボール	**燃えるごみ　17 個** タオル、制汗シート、菓子包装紙 弁当ポリ容器、イヤホンなど
燃えないごみ　1 個	**燃えないごみ　2 個** スプーン、栄養ドリンク空瓶 **プラ容器**　ペットボトル蓋

図 5　ポスター掲示後の大学構内のごみ

宮川・濱島（2009）[8] は岡山県在住の 489 世帯を対象に質問紙調査を行い、地域社会に対する意識とごみ減量行動との関連を分析しており、地域共同意識が低い者、および他者依存意識が高い者にはごみ減量行動の実施度が低い者が多いと報告している。このように住んでいる地域や利用している施設に愛着や誇りを持つことがごみ減量につながると考えられるため、ごみ減量のための学校行事の開催が望ましい。

また、実践例として、大学生が節水、節電などを心掛けながら、大学生が愛知伝統野菜を無駄なくエコ調理に取り組むことで [9]、物品の購入・使用の段階からごみ減量のための行動を取ることができるようになった。このような取り組みを継続することも、積極的な環境配慮行動につながるものと期待できる。

さらに、宮下ら（2023）[10] は大学生を対象に愛知伝統野菜の栽培を通して環境教育を行っている。大学生活において様々な体験活動は循環型社会のための行動変容になると考えられるため、教員の資質養成のためにも環境教育の充実も不可欠である。

謝辞

本調査にご協力いただいた大学生の皆様ならびに学生支援課の職員の方々に心より感謝申し上げます。

Ⅳ　要約

大学生の環境配慮行動について明らかにするため、Web アンケート調査や清掃活動を実施した。マイ水筒やマイ箸を持参せずに登校する大学生が多く、また、クラブ・サークル活動で利用する施設に対して美化意識の低い団体が多かった。大学構内を清掃すると、食品包装容器が多く散乱していた。CO_2 排出削減のため、環境配慮行動が積極的に取れるよう、大学生は自然環境に関心を持ち、自分事として学校生活のスタイルを見つめ直す機会が必要である。

参考文献

1）環境基本法 第 1 章総則（平成 5 年法律第 91 号、施行日：令和 3 年 9 月 1 日）
https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=405AC0000000091
（アクセス日：2023 年 11 月 1 日）

2）環境省 環境再生・資源循環局：一般廃棄物の排出及び処理状況等（令和 3 年度）について
https://www.env.go.jp/press/press_01383.html
（アクセス日：2023 年 11 月 1 日）

3）小泉　明・荒井康裕・谷川　昇・及川　智：家庭ごみに着目した世帯属性と減量化行動の総合的分析、環境システム研究論文集 30、pp.1－8（2002）

4）環境省 総合環境政策局：平成 28 年度環境にやさしいラ

イフスタイル実態調査報告書、p.13
https://www.env.go.jp/content/900497738.pdf
（アクセス日：2023 年 11 月 1 日）
5）筒井和美・横川萌衣・青山耀蘭・伊藤実萌・原田悦子・加藤祥子：大学生の家庭科衣生活領域の技術習得度とファストファッション消費行動の関係、教材開発学論集 11、pp.115－122（2023）
6）小島英子・阿部直也・大迫政浩：ライフステージに着目した住民のごみ問題に対する関心の変遷 －テキストマイニングによる解析－、環境科学会誌 28（5）、pp.343－358（2015）
7）西尾チヅル：消費者のゴミ減量行動の規定要因、消費者行動研究 11（2）、pp.1－18（2005）
8）宮川雅充・濱島淑恵：地域社会に対する意識とごみ減量行動との関連、日本家政学会誌 60（12）、pp.1025－1035（2009）
9）筒井和美・髙畑晶子：教員養成大学における特別支援教育のための嚥下調整食の調理、東海学校保健研究 47（1）、pp.35－44（2023）
10）宮下さくら・田中志歩・筒井和美：愛知伝統野菜「縮緬かぼちゃ」を活用した大学生の農業体験学習、愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 8、pp.61－69（2023）